

巻 頭 言

JFE スチール システム主監

菊川 裕幸



『情報システム』は、ITの飛躍的な進歩により大きく変貌を遂げてきた。ITが日常生活の中にまで入り込み、企業活動がITなくしては成り立たない状況になっている今日、JFE 技報でシステム特集号が発刊されるのも非常に意義深いものがあると感じている。

システムが活用され始めた初期の頃は、「どのように仕事や作業を効率化するか」という視点で業務分析や作業の標準化が行われ、色々な『作業の自動化』を進歩させてきた。鉄鋼業界も1970年代から世界に先駆けてシステム化に取り組み、製鉄所ではプロセスコンピュータと組み合わせて、本社スタッフ部門は膨大なデータを取り扱う手段として、効率化・省力化を推進し、日本鉄鋼業の競争力を高めてきた。

システム化の流れは情報を戦略的に活用する方向に進み、企業内の情報をデータベース(DB)に一元管理して『情報管理(活用)』を行うERP(enterprise resource planning)の考え方などが発展してきた。1990年代にはERPパッケージソフトを適用して生産性を高める事例が、欧米で多く見られるようになった。日本では、効率化と情報活用のためのシステム改造を局所最適で繰り返し、システム構造の複雑化とブラックボックス化を増大させてしまった。結果として、システム統合などの抜本的改革が難しくなり、全体最適を目指す『情報管理』の視点でのシステム改革活動の停滞を招いていた。

そして、企業の競争力はITを武器とした『ビジネス変革』のスピードによって左右される時代に突入してきた。情報システムそのものを変革の武器とすることもあつるし、最新ITで情報処理スピードを飛躍的に向上させて人が果たすべき役割を付加価値の高い領域にシフトさせていくなど、ITの活かし方は広範囲になってきている。

JFE スチール発足時のシステムに対する基本的な環境認識は上記のようなものであり、経営が求める『統合と変革』の基盤を3年で作り上げることが、新統合システム(J-Smile)の最重要課題であった。統合効果を最大発揮させ、経営の目指す姿を実現していくためには、上記3つの視点『作業の自動化』『情報管理』『ビジネス変革』のすべてを包含し、統合によりいっそう複雑化したシステムを一新した上で、

世の中の変化や利用者ニーズに迅速に対応できるシステムが必要であった。J-Smile は、最新 IT を積極的に適用して、ビジネス変化への対応が俊敏かつ柔軟にでき、鉄鋼版 ERP として成長できるシステムの構築を目指して、情報子会社と一緒に自社開発してきたものである。

J-Smile の特長は、鉄鋼ビジネスに関わる膨大なデータとその関連をモデル化し、情報をデータベース (DB) で一元管理して活用できることと、アプリケーション (AP) と DB を分離するなど、変化への素早い対応ができるシステム構造にしてあることである。

この情報基盤を活かして、お客様満足度を高めるための課題やマネジメント上の課題を把握して対応すること、そしてお客様のニーズや新しい業務要求などのビジネス変化を素早くシステムに反映して改革のスピードを上げることが、今後取り組むべき重要な課題である。この活動が、『システムを成長させて改革を続ける』ことに繋がると考えている。

そのためには、利用部門と IT 部門が一体となって課題を具体化し、目標を達成していくことが必要である。情報システム構築そのもので成果が得られた時代はすでに終わっている。今求められていることは、新たな視点で IT を活用して、改革のスピードを上げることと業務プロセスを変革して成長していくことである。

情報システムの使命は、『関係する方々の意思疎通を支援すること』にある。経営層から従業員、お客様・商社・取引先など、関係するすべての組織の方々の『意思疎通を活性化』して改革を進めていくことが肝要である。情報システムをお客様とのコミュニケーションの手段として活かし、JFE スチールとそのグループ企業がお客様と一緒に成長していくモデルを構築することが、お客様満足度を高め、ブランド力の向上に資すると考えている。

システムを活用される皆様方と IT 部門がお互いに切磋琢磨して、種々のビジネス課題の具体的な対応策をディスカッションしながらシステムを成長させ、改革で得られる成果を享受していただきたいと考える次第である。